

赤川次郎

傑作ユーモアサスペンス

MとN探偵局

悪魔を追いつめる!



MとN探偵局

悪魔を追い詰める！

一九九四年十二月三十日 初版発行

著者 赤川次郎

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六二)二〇五一(編集)

〇三(三三三五)四四四一(販売)

振替 〇〇一一〇六三二六六一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-50254-5

©J.Akagawa 1994
Printed in Japan

JOY NOVELS

傑作ユーモアサスペンス

MとN探偵局

悪魔を追い詰める!

赤川次郎

MとN探偵局 悪魔を追い詰める！／目次

MとN探偵局―犯人を捜す犯人

1 叫び

2 逃げる

3 手配

4 交渉

5 追いつめられて

6 奇妙な組合せ

7 影

8 包囲

エピソード

6

17

27

38

50

61

72

84

97

MとN探偵局―悪魔を追い詰める！

1 墜落

2 MとN

3 元気の素

4 同志

5 未亡人

6 襲撃

7 絶望

8 平手打ち

9 凶行

10 一瞬の隙

11 棺の窓

102

106

115

122

132

139

150

159

169

178

187

カバー・本文イラスト／中山 泰
カバーデザイン／サン・プランニング

MとN探偵局―犯人を捜す犯人

1 叫び

悲鳴が聞こえた。

「——何だ？」

と、哲郎は顔を上げた。「おい、ケンジ。何か聞こえなかったか？——おい、ケンジ！」

哲郎は振り返って、舌打ちした。そして、妙に腰を振りながら、体をクネクネさせているケンジの耳から、イヤホーンをはたき落とした。

「何だよ、兄貴！ 壊れちまうよ、俺の大事なウォークマンが」

「いい加減にしろ」

と、哲郎はにらんで、「仕事してるときにそんなもん、聞いている奴があるか！」

「ちゃんと見張ってるぜ」

と、ケンジが口を尖らす。

「聞こえなかったろう、変な叫び声が」

「叫び声って？」

「ま、いい。ともかく、ちゃんと用心してろよ」

哲郎は、周囲を見回した。

大丈夫だ。誰も見ちゃいない。

この駐車場は、哲郎たちの仕事にうつてつけである。夜間の照明がない。道の街灯の光は、遠くてほとんど中へ届いていない。

それに、屋外で、どの車もシートさえかけていない。そう高級な車があるわけじゃないが、それだけ

に、妙な防犯装置なんかわざわざつける奴はいない。

加えて、場所がいい。——いや、車の持主にとっては逆だが、この駐車場は、マンション二棟分の車が置かれていて、しかも、どっちのマンションからも死角になっていて、見えないのだ。

これじゃ、「どうぞ好きにして下さい」と並べてくれているようなものである。

そして哲郎は、こんなときに遠慮する男じゃなかった。

「——兄貴」

と、ケンジが言った。

「何だよ」

「TVカメラがあるぜ」

合い鍵を捜して、重い鍵の束をジャラジャラいわ

せながら、目の前の車にためていた哲郎は、顔を上げた。

「ほら、あそこに」

と、ケンジが指さす方向に、薄暗くてよく見えな
いが、確かに塀の上の高い位置にTVカメラが設置
してある。

「映ってんじゃない、俺たち？」

「心配すんな」

と、哲郎は笑って、「カメラがあるのは知ってた
さ。でもな——安心しろ。あれは外形だけ。中身は
空っぽなんだ。カカシと一緒にさ。カメラを見りや
びると思って、くつつけてあるんだ」

「何だ、そうか」

と、ケンジがつまらなそうに、「せつかくよく映
ろうと思って、髪も整えたんだぜ」

「呑気な奴だな」

と、哲郎は苦笑いした。「ちゃんと道の方を見てろよ」

「うん」

ケンジがブラッと駐車場から道路の方へ出て行く。

哲郎は首を振った。——頼りない奴だが、哲郎のことを、「兄貴」と呼んでくっついて来る。追い払うというわけにもいかなかった。

「——よし、開いた」

車の中を、予め懐中電灯で照らし、何かありそうな車だけ開ける。そして、バッグとかアクセサリ——とか、金になりそうな物だけをとる。

哲郎は、他の連中のように、何も見付からなかったからといって、腹いせに車を叩き壊すような馬鹿

な真似はしなかった。むだに罪状を重ねて、万一捕まったときの刑期を長くすることはない。

「——OK」

と、呟いた。

置き忘れたのだろう、バッグの中から、ネックレスやイヤリングが出て来た。

哲郎は慣れているので、本物がガラスか、その光で見分けられる。——こいつは結構な品物だ。素早くポケットへ入れる。

さて……。あと二、三台やったら、今日は引揚げよう。もう少し、もう少し、という欲が災いのもつだ。

次の車へ移ろうとして、哲郎は目を上げた。

TVカメラが見える。——ちゃんと調べてるんだぜ。そんな「はったり」にごまかされやしねえ。

ニヤリと笑って、次の車の中を覗こうとした哲郎は、あのTVカメラがゆっくり首を振っているのを見て、愕然とした。

動いた……。確かに動いた！

あれがただの外箱だけのものなら、首など振らない。——畜生！

哲郎は急いで駐車場を出た。——あのカメラで、ここを監視している人間がいたとしたら、一一〇番して、もうパトカーがこっちへ向っている。いや、もうここへ着いていてもおかしくない。

畜生！ 失敗だった。

もし逃げられても、あのカメラがこっちの顔をはつきり撮っていたら……。

「ケンジ！——ケンジ！」

と、哲郎は押し殺した声で言った。「どこだ！」

——ケンジ！」

どこに行った？ あの馬鹿め！

苛々しながら見回していると——植込みから、フラツとケンジが出て来た。

「おい！ 何してんだ。早く逃げるんだ、パトカーが来るぞ」

と、哲郎は走りかけたが——。

ケンジがついて来ないのである。ブーツと突っ立っている。

「おい！ 捕まりたいのか！ しつかりしろ！」

と、駆け戻り、ケンジの手をつかんで引張ろうとしたが……。

ベタツと何かが手にくっつく感覚があった。

「——ケンジ。何だ、これ？」

手を街灯の明りにかざして、それが血らしいと氣

「かざす」
「先験をさへせらる」

付いた哲郎は、愕然とした。

「どうしたんだ？ どこでつけた！」

ケンジは、哲郎に肩をつかんで揺さぶられ、やつと我に返った様子で、

「兄貴……。俺じゃない！ 俺じゃないんだよ。本当だ。足が見えて……。で、中を探ってみたら……」

「足？」

哲郎は初めて気付いた。歩道と駐車場の間を分けている植込みから、白い足首が覗いている。

哲郎は、近寄ってかがみ込んだ。——ほとんど全身が植込みの間に押し込まれているので、よく見えないが、足首だけでも若い女の子だろうと分る。

触らないように用心しながら植込みを左手で押しやって、明りで照らしてみる。

哲郎でさえ、一瞬血の気がひいた。

少女——たぶん、十五、六だろう。ブレザーの制服。プリーツスカート。

今、それは血に染まっていた。

刃物の傷が、少女の喉から胸、腹へと一気につながって、血が溢れるように出ただろうと思われた。

「——ひどい」

立ち上って、さすがに少しよろけた。

「兄貴……。これ……例の？」

ケンジの声はかすれていた。

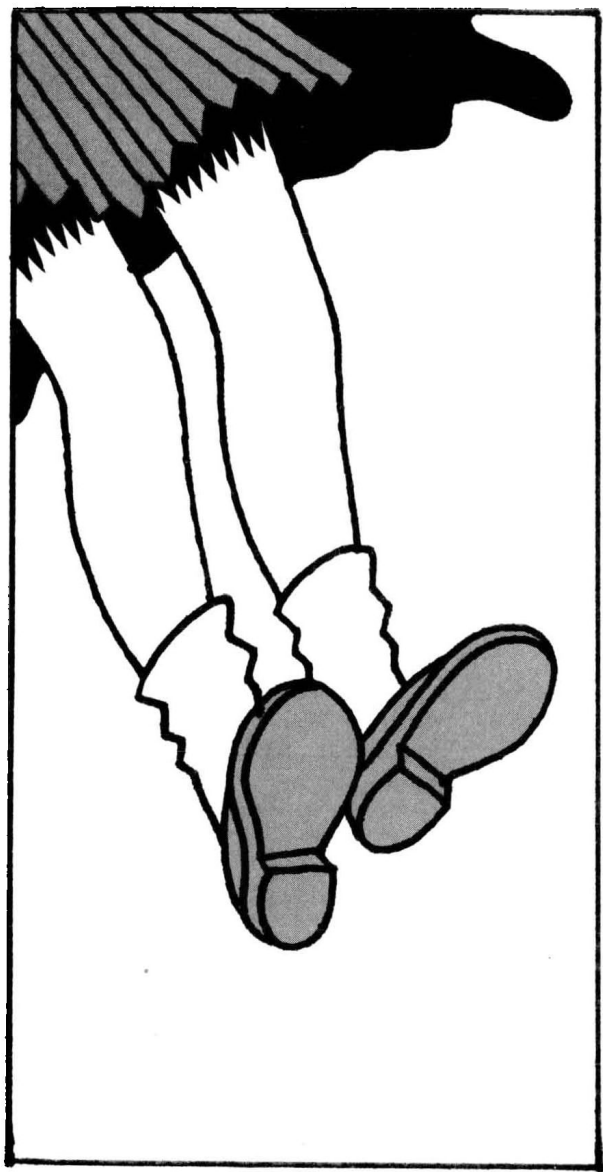
「たぶん……。ともかく、俺たちは関係ないんだ。行くんだ、急いで」

二人は足早にその場を離れた。走ると目立つ。少し急いでいる感じで歩くのだ。

「兄貴……」

と、ケンジがふらついて、「吐きそうだ」

ふらふらする



「しつかりしろ！ 早く逃げねえと——」

と言っているそばから、ケンジは道端にかがんで吐いてしまった。

「急げよ。人が来るぞ！」

哲郎は気が気じゃなかった。そして、周囲を見回したが……。

そのとき、一番見たくないものが目に入った。

——道の向うから、サツと光が射したと思うと、パトカーが現われたのである。

運悪く、哲郎たちは隠れようもなく、ライトの中に入ってしまった。

「逃げろ！」

と、哲郎は、ケンジの腕をつかんだ。「急げ！」

二人が駆け出した。当然、パトカーは追って来る。

「止め！ ——その二人、止め！」

マイクを通した声が、辺りに響きわたった。

ケンジは、まだふらついていて、とても一緒には走れない。

「分れるんだ！」

と、哲郎は怒鳴って、ケンジを反対側へと押しやった。「走れ！ 死にもの狂いで走れ！」

それ以上、言ってやる言葉もない。哲郎はパトカーが自分を追って来るように、目立つ走り方をした。もちろん、パトカーと競っても、かなうはずがない。しかし、少しでもケンジを遠くへ逃がしてやりたかったのだ。

パトカーがキーツとブレイキの音をたてて停り、警官が一人、飛び出して来た。その警官がケンジの後を追ひ、パトカーはまた走り出して、哲郎を追っ

て来た。

哲郎はその間に少し走れたが、何といつても向うは車である。たちまち後ろへ迫つて来た。

それでも哲郎は必死で走った。——心臓が破裂しそうだったが、ともかく走った。

逃げられると思つていたわけではない。ただ、走り続けるしかなかったのだ。立ち止る、なんてことを考える余裕もなかった。

わきへ逃げ込める道はないかと目は必死で左右へ走ったが、運悪くどつちも塀が続いている。

畜生！ ひき殺す気かよ！

パトカーが唸りを上げて迫つて来る。

——もうだめだ！

そのとき、突然目の前の角を曲つて、車が現われたのだ。

一瞬、哲郎はそれが現実のものなのか、幻なのかと疑った。

その車がクラクションを鳴らす。正面からのライトがまぶしく視界を覆う。

前と後ろから車が——。

哲郎は何も考えていたわけではない。考えている余裕などなかった。体の方が勝手に反応していた。

哲郎は横へと飛んだ。思い切り。

道へ転がるより早く、車と車のぶつかる音がした。哲郎は頭を抱えて、道に転がった。

野田は、体を揺さぶられて目を覚ました。

「——何だ。何してる？」

と、覗き込んでいるアケミを見上げて言った。

「何してる、はないでしょ」

アケミは、ちよつと口を尖らして、「私、あなたの（愛人）でしよう。同じベッドにいてどこが悪いの？」

「そうか。——分った、分った」

野田は欠伸をして、「どうしたんだ？ 今夜はあつちが忙しいのか」

「電話」

「俺に？」

「だから起こしたのよ。急な用ですって」

と、アケミは言つた。「あの子よ。ハンサムな……。何てつたつけ？ テツオ？」

「哲郎か」

野田は起き上つた。「あいつが何の用だ、こんな時間に」

「さあ。直接訊いて」

アケミはベッドから出ると、「向うへ行つてる？」

「そうだな。——じゃ、そうしてくれ」

野田は、アケミに氣をつかれて苦笑していた。

やれやれ……。四十五で、女に起こされないと電話にも出られないのか。

ナイトテーブルの明りを点けて、外して置いてある受話器へ手を伸ばした。

野田重人は、このところたいい一人で寝ている。——妻と子供は北海道にいて、めつたに会うこともない。しかし、それは安全のためでもあつた。

何しろ野田は「裏の顔」を持つ企業人である。身辺は充分に警護させていたが、家族のガードにまでは手が回らないというのが正直なところだ。

その代り、「女」には不自由しないし、また野田

を知る人間の間では、「女殺し」で通っている。アケミもその「大勢」の一人なのだが……。

「——もしもし」

と、野田が出ると、

「あ。——哲郎です。社長、すみません。しくじち
ちまって」

哲郎の声は普通ではなかった。ひどく息を切らし、しかも人目をはばかっている様子である。

「何だ、どうした？」

「車をやって……パトカーが来ちまったんです」

「そいつはまずかったな。で、逃げたのか」

「何とか……。でも、ケンジの奴と別々になったんで、あいつがどうしたか分かりません」

哲郎は、少し間を置いて、「防犯カメラに映って
たらしいんです」

「何だと？ お前らしくもないな」

「すみません。もうご連絡しません。縁を切ったことに……」

「そうか。——分った」

「俺は何とか逃げます。それから……」

「それから？ まだあるのか」

哲郎はためらった。そして、

「人が来るんで。もう切ります」

と、早口に言う、「色々お世話になりました」

「ああ。気を付けてな」

「ありがとうございます。じゃ」

あわただしく電話を切ってしまう。

少しして、アケミが戻って来た。

「どうかしたの？」

と、大きなベッドへ入って来る。